知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

March 2021 3

山の上の神々のもとへ

～南知多の山をめぐる

山の上の神々のもとへ

～南知多の山をめぐる

遠くに出掛けるのも憚(はばか)られる日々が続くが、そんな時は地元の「密にならないスポット」に出掛けてみれば、きっといい気分転換になるだろう。今回はそんな場所を南知多町からピックアップしてみた。

遥かなる富士、そこにある富士

もう一か月もすれば桜の開花の声が聞こえてくる。知多半島にも多くの桜名所があるが、今回はそのひとつ、南知多町豊浜の「桜公園」の話から始めたい。

桜公園があるのは豊浜の西部に位置する中洲地区の山の上、国道247号から山道を車で二分ほど登ったところ。山上に遊具やベンチが置かれた小さな広場があり、その周囲に桜が植樹されているのだが、ここは桜が咲いていなくとも行く価値がある。海側の山の斜面の木々が伐採されており、雄大な景色を眺めることができるのだ。豊浜の町からそう遠くはないのに、まるで天上の別天地にいるかのような気分にさせてくれる素敵な場所である。

真下に広がるのは伊勢湾、その向こうに横たわるのは伊勢志摩の山並みと、神島、伊良湖岬。東の方角も見晴らしがよく、南知多の丘越しに三河湾、三ヶ根山、蒲郡の西浦半島が見え、空気が澄み渡った冬の晴れた日には、なんと富士山まで拝めるという。

そんな桜公園の背後にある小高い頂を、地元の人たちは「富士ヶ峰」と呼んでいる。標高は百二十五メートル。ここから富士山が見えるので、そう呼ばれるようになったと伝えられている。

知多半島は、かつて富士山信仰が盛んだった土地。江戸時代後期から戦前にかけて、村ごとに「講」と呼ばれるグループを作って旅費を積み立て、団体で富士山登山に出掛けることが流行した。知多半島の寺や神社には、富士山登山記念として奉納された絵馬をよく見かける（本誌2017年7月号「楽しい絵馬の世界へ」参照）。霊峰富士を遥拝できるこの山は、特別な場所と考えられていた。

山頂の真下には「富士ヶ峰神社」が祀られており、毎年二月二十日に大祭が執り行われる。小さな神社だが参道の階段には手すりが設置され、最近立てられた新しい幟も並んでいる。地元の人だけでなく、桜公園を訪れた多くの人がお参りしていくのだろう。

富士ヶ峰神社は昭和三十年（一九五五）、山の下にある中洲地区の五人が発起人となって創建された。富士山の西南麓に鎮座する富士山本宮浅間大社を勧請し、祭神は木花之佐久夜毘売命。この女神は水徳の神で、噴火した富士山を鎮めたり、東征の折に、夜盗の野火で窮地に陥った日本武尊を救ったとされている。また、航海、漁業、農業などの守護神ともされているというから、まったくこの地にふさわしい。高所から伊勢湾を航行する船を見守っているのだ。

神名の「木花」は桜を意味している。桜公園もそのことにちなんで開かれたもの。神社の世話をする中洲の人たちによって、少しずつ拡大されてきたという。最近は、富士ヶ峰神社世話人会と豊浜まちづくり協議会によって神社を盛り上げる取り組みも活発だ。神社の入口には案内板が設置され、昨年末からは絵馬が用意されるようになった。木花之佐久夜毘売命は家庭円満や安産の女神でもあるので、夫婦や恋人で参拝するのもいいだろう。祠の脇の道を登れば頂上まではすぐ。そこには自由に書き込めるメッセージボードが設置されている。

四天王、内海に見参！

豊浜中洲の富士ヶ峰神社は、小さいながらもそれなりに知られているが、内海の山の中には、人知れず祀られている神々がいる。その名も「内海四天王」。東西南北に一体ずつ配置されているのだが、徒歩でないと辿り着けない場所であり、観光名所というわけでもないので、地元の年配者以外にはほとんど知られていないのではないだろうか。

そもそも四天王とは、仏法の守護神である「持国天」「増長天」「広目天」「多聞天」の四神の総称である。仏教の世界では、その中心に聳える「須弥山」の中腹の四方に住むとされ、身には甲冑をまとい、手には武器を持ち、厳めしい顔で仏法僧を守る神であるという。

四天王といえば、聖徳太子が崇敬した伝説がよく知られている。用明天皇二年（五八七）に起きた蘇我氏と物部氏の争いにおいて、劣勢の蘇我氏についていた厩戸皇子（聖徳太子）が、白膠木の木で四天王像を彫り戦勝を祈願した。そのおかげで蘇我氏は勝利し、聖徳太子は数年後、現在の大阪市天王寺区に四天王寺を建立した…ということが「日本書紀」に記されている

その〝武闘派〟な姿はとっつきにくいイメージもあるが、味方となれば、禍を蹴散らしてくれる頼もしい存在である。内海四天王は江戸時代末期の文久二年（一八六二）頃、内海駅のすぐ南にある妙音寺の十四世魯学禅法和尚が、村の繁栄と幸福を願って四方の見晴らしの良い場所に安置したものという。

きっと、世情不穏で先行き不安だった幕末という時代に、一人の僧侶が安寧の思いを込めて作ったのだろう。新型コロナウイルスで世界中が不安と混乱に陥った昨年、疫病除けとしてにわかに「アマビエ」なる妖怪がクローズアップされたが、内海の人にとってはアマビエ以上の存在といえるかもしれない。コロナ禍がなかなか収まりそうにない今、改めて内海四天王を巡って祈るのは、意味のあることではなかろうか。

ということで冬のある日、四天王を探して内海山中を徘徊してみた。

四天王の持ち場は、東が持国天、南が増長天、西が広目天、北が多聞天で、内海四天王もそれに対応する形で置かれている。まず目指したのは西にいる広目天。場所は千鳥ヶ浜の北、内海の西の端に聳える標高約四十メートルの「城山」である。

登り口は、国道247号の旧道にあたる「今場坂」へ続く道沿い。案内板に従って、一人分の幅しかない踏み分け道に入り込む。最初は傾斜がややきつく一瞬ひるむが、そこを過ぎればあとはさほど急傾斜の箇所はなく、木立に包まれた心地よいハイキングコースといった感じだ。

登り口から十分ほど歩くと平たい場所に出る。そこに、内海・山海まちづくり協議会が設置した岡部城跡の案内板がある。城山の名はその岡部城に由来し、ここが城の要所のようだ。案内板の記述によると、岡部城は室町時代の大永年間（一五二一～二八）に内海佐治氏の居城として築かれたという。

そこから少し進むと、木々の間に広目天の石像がちょこんと立っていた。高さは四、五十センチといったところ。祠はなく、台座の上に置かれ、小さな木製の鳥居が前に立てかけてある。像の回りの下草は払われており、盆の上にわずかばかりの賽銭が置かれているところを見ると、ときどき地元の人がお参りに来ているのだろう。

その顔つきはあまり厳めしくはなく、どこか愛嬌があるのが印象的だ。これを彫った石工の人柄が映し出されているのかもしれない。

荒れ果てた県道の先に

続いて向かったのは東の増長天。礫が浦の北に聳える標高約百十六メートルの「長峯山」に祀られている。この頂のすぐ東は、知多半島の最高峰、標高百二十八メートルの高峯山があり、そこにはかつて名鉄系のレジャー施設「内海フォレストパーク」があった。ここに通じる車道沿いには「海のしょうげつ」や「時間の森」があり、昔も今も観光と縁の深い場所である。

増長天が立つのは、車道から山道をほんの少し登ったところ。こちらも広目天と似た雰囲気の造形だが、少し目つきが鋭い。山の真下には海があり、この増長天も海から入って来る災いを防ぐ役割を与えられていたのかもしれない。ただ、木立に遮られて桜公園のような絶景を楽しめないのが惜しい。昔はこんなに木が育っておらず、眺望もよかったことだろう。

三つ目の持国天は、内海の中心部から三キロほど奥まったところに位置する内福寺地区の山の中にある。内海フォレストパークの手前で分岐する道に入っていくのだが、この道がなかなかすごい。スマートフォンのグーグルマップでは県道276号と表示されているので突入してみたのだが、幅は軽自動車ぎりぎり分しかない。飛び出した木の枝や竹が側面をこすりまくるし、路面は落ち葉に埋もれて滑りやすい。これはハマった…と思ったが、途中で引き返そうにもUターンできる場所がぜんぜん見当たらない。

半泣きになりながら四百メートルほど進んで、なんとか車を方向転換できそうな空間が見つかり、やれやれ。それにしてもとんでもない〝険道〟である。こんな道をなぜ県道指定したのだろうか。ここを目指そうと思う人は、無理をせず分岐点から歩いて行っていただきたい。

肝心の持国天は、車を停めたところからさらに百メートル先の一段高いところに祀られていた。睨みつけるようなその顔は、横着して車で来ようとした我々を「愚か者！」と一喝しているかのようだった。

火防の神は山の奥にいる

最後の多聞天が祀られているのは、内海駅北西の山の中。知多四国第四十七番札所持宝院の下から急坂の車道を少し登り、草生した山道に入ると、程なくして木立の中に石像が現れる。この多聞天は兜を被っており、四体ではいちばん武神っぽい。この場所の標高は約五十六メートル。もし南側の木が伐採されていれば、多聞天の視線の先には内海の町が広がっているはずである。

これにて四天王はすべてめぐり終えたが、さらに上の方へと道が通じている。この道は地元で「秋葉道」と呼ばれ、この先にある秋葉社を経て、野間の内扇地区へと下りてゆく古道という。山上の神の探訪の最後に、秋葉社にもお参りしていこう。

多聞天からの登り道はやがて、持宝院下からの車道と合流する。そこには塚のようなこんもりとした場所があり、「扇松 お祭八山」と手書きされた看板と、「祭八神山碑」と刻まれた明治三十年（一八九七）年建立の石碑が立っている。碑文は漢文で記されているので何が書いてあるのかよくわからないが、かろうじて読めた一部分からすると、どうやら内海の名所のひとつで、内海の氏神である入見神社に関係する場所らしい。

あとで「郷土研究誌みなみ」のバックナンバーを調べたところ、第二十八号にこの場所のことが書かれたエッセイを見つけた。それによると、ここには昭和初期まで「おさ八の扇松」と呼ばれる数本の松の巨木があり、山上で伊勢湾を航行する船からもよく見えたので、船乗りたちの目印になっていたという。明治時代、内海の酒造家にして千石船の船持である磯部昇平という人が、その扇松が伐採さ

広目天

持国天

増長天

多聞天

れないよう金を出して買い取ったようだ。扇松はその後徐々に枯れてゆき、最後の一本も伊勢湾台風で折れてしまったとか。

木々の隙間からは、内海の町の一部と陽光にきらめく伊勢湾が見える。ここから千鳥ヶ浜まで約一・五キロ。この距離で海路標識の役目を果たしていたのなら、さぞかし立派な松だったことだろう。

お祭八山から先へ進むと、次第に鬱蒼（うっそう）とした森の中に入っていく。そして突然、秋葉社が現れた。

道から石段を登った少し高い場所に、板塀に囲まれた祠が建っている。ちょうど本殿の頭上に木々の切れ目があり、わずかに光が差し込んでくる。静寂に包まれた山の中の社は、なかなか神秘的だ。

秋葉社は火防の神で、火之加具土命（ほのかぐつちのかみ）を祀る。総本社は静岡県浜松市天竜区の秋葉山本宮秋葉神社で、標高八百八十五メートルの山上にある。この秋葉社も知多半島では高い標高百十四メートルの地にあるが、総本社にならってのことだろうか。創建は江戸時代半ばの宝暦三年（一七五三）。

密にならない南知多の山歩きを終え、清々しい気分に満たされた。あとは一刻も早くコロナ禍が消え去るよう、神々の力が世に行き渡ることを祈りたい。

神々は高い場所からふるさとを見守っている。

〈取材協力〉大岩幸三さん（富士ヶ峰神社世話人会）／法聲山妙音寺
〈参考文献〉郷土研究誌みなみ 第28号所収 内田辰男「内海の古道“秋葉越え”」（南知多町郷土研究会・昭和54年）／南知多町誌 本文編